

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

研究科セミナー

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第35回

「歴史の一部になるということ——ルワンダ大虐殺から19年——」

ルダシングワ真美（ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト日本事務所代表）

---

この度のグローバル・ジャスティスセミナーはルダシングワ真美氏をお招きした。テーマは94年の民族紛争を起点に、政治、文化、経済の諸点と関連させながら、ルワンダ共和国の歴史と現状についての報告であり、その文脈に位置する氏自身のNGO「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」での活動の紹介でもあった。

講演の前半部は、ルワンダの人々の日常生活や、彼らを抱く雄大な自然美、そして、それとは対照的な様相を呈する近年の経済発展によって聳え立つビル群など、様々な側面を鮮明且つ象徴的な写真を巧みに織り交ぜながら、ルワンダの現在について氏は話された。ルワンダは地図で確認すれば自ずと了解されるが、近隣諸国に比べ、国土は狭く、地形は「千の丘の国」と称されるほど、多くの丘が連続し、隆起している。農村部では、人々がお世辞にも立派とはいえない自転車にまたがり、麻袋いっばいに詰め込んだ芋、豆、バナナのような主産物を運ぶため、丘から丘へと往来する。首都キガリでは丘の頂に、近年発展著しいIT産業を中心に立派なビルが立ち並び、それを取り囲むように民家のような低い建物がひしめき合う。一見すると対極にあるこれらの風景は、貧富の格差を示しているかのようだ。しかし、紛争終結後の共和国の平穏を楽しむかのように、人々は携帯電話を所持し、きれいなドレスで結婚式を挙げ、ビール会社のキャンペーンに娯楽を見出すと同時に、環境意識を高く持つことで、一等国であることを誇る。都市部と農村部の対極的な両面は、ルワンダの「アフリカの奇跡」と称される発展と明るい未来への確信の点で地続きである。

しかし、目を凝らせば、なおも残る紛争の爪痕がある。氏が行うのは、そのケアである。足を失った人に、義肢を無償で提供するのである。資金は政府からの援助と企業等からの寄付で賄う。氏は、義肢製作に纏わる様々な苦勞の存在を紹介しつつ、しかし義肢を受け取る際に見せる患者の笑顔と感謝の念に励まされると同時に、それが活動の遣り甲斐であることを強調された。

NGO発足当初、政府から譲り受けた荒地を大変な苦勞をして一から整備し築いた施設には、いまでは、基幹である義肢製作所は勿論のこと、NGO活動の継続性のための僅かながらも収益確保のためのゲストハウスやレストランが存在する。最近では、貧富の格差の現状を示すようだが、折角給付された義肢を売る人も増えているようで、その現状に応えるために、氏は職業訓練の事業も展開している。

このようにますます充実の度を高める障害者支援活動が次世代にも引き継がれていくこ

とを氏は切願する。しかし、最後に氏が紹介されたとあるエピソードをここで取り上げておきたい。それは、現地のある若い女性スタッフが、仕事の大変さと給与の低さを理由に辞職したというものである。その女性はキレイなオフィスワークを求めて転職したとのことであった。この事実は、NGO 活動の意義とそこで働く人々の極めて実際的な欲望を明らかにしていると同時に、アカデミズムの場にいる我々への問題提起ともなっていよう。救われたい人と救いたい人、国内ではなく国外の人を助けたいという人と、あくまで眼前で苦しむ人を助けたい人、各人が抱く実際的な欲求とそのジレンマ。あるいは、そもそもその惨禍をもたらした当事者の責任を糺す必要。ともすれば美談や英雄譚として NGO 活動は受け取られてしまうが、その裏で忘却される無数の欲望が厳然と存在する。NGO 活動、それは一方の苦しみを他方へと移すものではないのか。筆者が受け取ったのは、この問いであった。

(文責：和田昌也)